

西豪州日本人会・日本クラブとの共催による砕氷艦しらせ歓迎会での挨拶

砕氷艦しらせ 斎藤艦長、
海上自衛隊の皆様、
そして西豪州日本人会、西豪州日本クラブの皆様、

西豪州の邦人代表としてひとことご挨拶を申し上げます。
南極観測の任務を無事遂行されてのフリーマントルへの寄港、誠にお疲れ様でございます。昨夜は素晴らしい艦上レセプションを開催して頂きまして誠にありがとうございました。

当地の日豪関係者はしらせ艦上での交流活動が再び可能となることを心待ちにしておりました。昨夜の参加者からは大変感銘を受けたとして、本日多数の御礼が寄せられております。日豪間の友好促進に大きな貢献を頂きましたこと心より感謝申し上げます。

そして本日もフリーマントル・カレッジとパース日本人学校の子供たちに艦内見学の機会を頂き丁寧なご説明を頂きました。子供たちは大きな喜びの表情で活発な質疑が行われたとのこと、きっと今日の訪問を忘れることなく、科学への関心と将来への夢を育んで行くものと確信しております。

昨夜、教育・多文化大臣代行として出席した主賓のムバラカイ西豪州下院議員がスピーチの中で、2016年にしらせが、座礁して氷に閉じ込められた豪州の砕氷艦オーロラ・オーストラリス号乗員66名を救助したことについて言及し、しらせへの感謝は忘れないとし、日豪協力の一例として述べられました。

しらせ乗員が豪観測隊員66名を無事ケーシー基地におくりとどけた1週間あまりの支援活動は、当時、国境のない大陸「南極」ならではの助け合い精神の発現として報じられました。困難に陥った外国観測隊の支援を率先して行うことで日本への尊敬につながっていることは、昨日のムバラカイ議員の発言からも明らかです。

昨夜、当時の大鎚(おおが)艦長のインタビューを読み返しましたが、日程を変更して急遽救助に向かい、限られた燃料と食糧をやりくりしたこと、二人部屋を三人で使い、艦内では一緒に和太鼓も叩いて励ましたことも述べられていました。皆様の身体を張った努力を知り、深い敬意と御礼を申し上げます。

極限の状態と言え、100年に1度の感染症の蔓延により、南極大陸にコロナを持ち込まないという責任を果たすため、大変なご苦労があったとうかがっています。私は、前職はアフリカ大陸最南端のケープタウンでしたが、第61次越冬隊の1名が、体調を崩され、緊急帰国されるというオペレーションに関わりしました。2020年5月の厳しいロックダウンの中、特別許可を得て上陸し、日本人医師と2名、針の孔を通すような綱渡りで帰国する緊急オペレーションでした。橋田観測隊長は、その際に極

地研におられ緊密に連絡をとらせて頂きましたので、昨日の再開は不思議なご縁でした。

先例がなく成功する保証がないチャレンジであっても、冷静な判断と、粘り強い努力で、乗り越えられてきた皆様のご尽力にあらためて敬意を表します。

そして当地にも人間のドラマはあります。本日司会を務められている小松崎西豪州日本クラブ会長は、交流活動ができなかったコロナの時代を含め、しらせの入港・出港時には必ず日豪の国旗をもって、他のしらせサポーターとともに岸壁に向われております。こうした西豪州の在留邦人の心意気には、ロールモデルがあり、西豪州に1971年に移住した賀陽敬信(かようきょうしん)元日本クラブ会長は、西豪州空手の父としても広く知られておりますが、砕氷艦ふじの時代から、何があっても日豪双方の国旗を携えてフリーマントルに赴かれておりました。ご高齢のため今回ご出席は叶いませんでしたが、こうした先人の心意気は今も西豪州の日本人社会に引き継がれております。

1912年の白瀬大尉による南極探検でもオーストラリア関係者からの支援がありました。南極条約加盟後も、初代しらせによる同様な救出劇を含め、様々な協力が重ねられております。昨日ムバラカイ議員も、オゾンホールの発見など日本の南極観測の貢献の大きさと南極をめぐる日豪協力の重要性を式典前の会話の中で述べていました。極限の状態だからこそ展開されるドラマ、人間のすばらしさ、日本人の輝きを教えて頂ける、しらせのフリーマントル来港は、そのような、かけがえのない機会であると心より感謝しております。

西豪州在留邦人は、本年11月寄港の際の当地での交流行事へのご参加、剣道やその他の武道の練習等を一緒にさせて頂くことを含め楽しみにしております。ご検討を頂ければ幸いに思います。

本日は、短い間ですが、楽しんで頂ければと思います。そして日本への安全無事の航海を継続されることを祈念しております。砕氷艦しらせと南極観測活動の今後の益々のご発展を祈念して私の挨拶に代えさせていただきます。

ありがとうございました。

(了)